大滝神社社殿と柏原八幡宮社殿 ―社殿の類似性と独創性―

国京克巳

はじめに

越前市大滝町にある大滝神社里宮（下宮）の本殿及び拝殿は、天保十四年（一八四三）に永平寺大工大久保勘左衛門等によって造られ、国の重要文化財に指定されている（写真1）。前稿では大滝神社の普請関係文書と大久保勘左衛門の覚書「萬覚帳」を検討して、現社殿の建設経過を明らかにした。その上で神社蔵の絵図が普請関係文書の「御本社金積帳」と「萬覚帳」の金積とほぼ一致していることを確認し、絵図と「御本社木積帳」から当初計画の本殿及び拝殿の平面を明らかにした。さらに「金銀米出入大工勘左衛門殿請取帳」と「萬覚帳」を相互に検討し、現社殿への設計変更が天保十二年七月頃には完了していたことを明らかにした[1]。しかし、前稿では、現本殿及び拝殿が、一部の研究者によって指摘されている柏原八幡宮本殿及び拝殿の影響を受けているのではないかとする点を明らかにすることが出来なかった（写真2）。

そこで本稿は、柏原八幡宮の本殿及び拝殿（以下「柏原社殿」と称す）、大久保勘左衛門による当初の大滝神社の本殿及び拝殿案（以下「当初社殿案」と称す）、現大滝神社里宮の本殿及び拝殿（以下、本殿及び拝殿を「現社殿」と称す）を詳細に検討し、柏原社殿の影響が考えられる部分、別の影響が考えられる部分を明らかにする。その上で、別の影響がどこから生じたのかを推測するものである。また、さらに新たに見いだされた決算帳から、大久保勘左衛門が請負った工事内容、当初社殿案から現社殿に変更された時期を再確認する。なお、柏原社殿に関する詳細事項は『重要文化財八幡神社本殿及び拝殿修理工事報告書』によっている[2]。

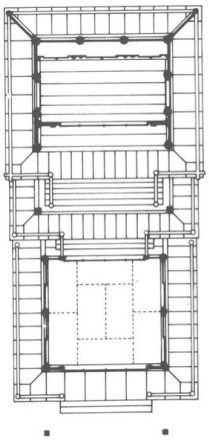
一　各社殿平面の比較

写真１　大滝神社社殿（里宮）外観

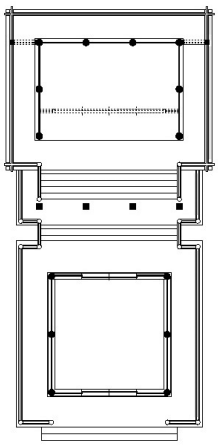
写真２　柏原八幡宮社殿外観

柏原社殿、当初社殿案、現社殿の平面をほぼ同一縮尺で図１に示した。柏原社殿は当初社殿案や現社殿と比較して一回り大きいこと、本殿と拝殿の外壁が同一面を形成して一つの建物となっているのに対して、当初社殿案や現社殿は平面的に別々の建物となっている点が大きく異なる。しかし、本殿と拝殿を屋根で繋ぎ一つの建物とする構成は同じである（後掲の図２参照）。

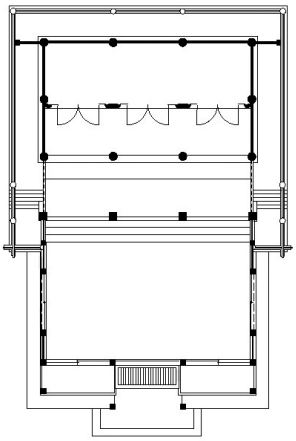
本殿はいずれも間口三間で、奥行は柏原社殿と当初社殿案が二間、現社殿が三間と異なる。本殿の四周に廻り縁を設け、前面一間弱入ったところに建具を立て内陣とすること、脇障子を設けることは三社殿とも同じである。ただし、前二者が脇障子を正面に向けられるの



大滝神社本殿及び拝殿
（『福井県史』より転載）



大滝神社当初社殿案



柏原八幡宮社殿
（『修理工事報告書』より作図）

図１　三社殿の平面図

に対して、現社殿は四五度斜め奥に振られる。

向拝は何れの社殿も正面三間いっぱいに設けられるが、柏原社殿は本殿との間を前室とする点が異なる。しかし、柏原社殿は前室が当初の浜床とみられる部分で、廻り縁の正面側の両端に木階が残り、前室内に周囲廻り縁と同じ高さで段（供物壇）が設けられ、さらに前室の床が当初の浜床の高さと考えられることから（後掲の図3参照）、基本は三社殿共に同じ形であったとみられる。

向拝と拝殿が木階で繋がる構成は同じであるが、柏原社殿の木階は当初の浜床への一重である。一方、当初社殿案や現社殿は向拝浜床への木階と浜床から廻り縁への木階が二重となり、拝殿とのつなぎ部分が吹き抜けとなる。現社殿は木階幅を縮め本殿の独立性を当初社殿案よりさらに高めている。また、現社殿は向拝中柱を抜いているが、他二社殿はそのままである。

拝殿は柏原社殿が間口三間奥行一間半、当初社殿案と現社殿が二間四方と異なる。柏原社殿は本殿木階前の繋ぎ部分半間を含めると奥行二間となる。もっとも、現在のように拝殿前面の吹き放ちをもつ平面は、吹き放ちを含めた奥行二間が当初の拝殿で、本殿との繋ぎ半間は吹き放ち部と共に後から改造されたものである（後述）。

柏原社殿の拝殿間口は三間で、当初社殿案・現社殿の二間と異なるが、当初社殿案と現社殿の拝殿間口幅はほぼ本殿間口幅に近く、本殿幅いっぱいの柏原社殿に似ている。拝殿周囲に取り付く廻り縁は柏原社殿の縁の出が本殿の半分程度で小さい。また柏原社殿は拝殿前方を半間の吹き放ち床とし、その中央に賽銭箱を作り付け、吹き放ち床からわずか手前に向拝柱を立てる。この吹き放ち部を別として現社殿も向拝柱を設けている。

三社殿はいずれも正面に唐破風を設けることは同じだが、その手法が異なる。柏原社殿は吹き放ちの柱よりやや手前に出した一間幅の向拝柱で唐破風屋根のみを支持する。当初社殿案は向拝柱がなく、軒の一部に軒唐破風を設ける。現社殿は拝殿と同じ三間幅の向拝とし、向拝柱を一間手前に置いて主屋の入母屋造妻入り屋根を葺き下ろし、中央に軒唐破風を設ける。

柏原社殿は天正十三年（一五八五）に創建され、元禄頃（十七世紀末）、文政十一年（一八二八）、天保六年（一八三五）、明治初期（一八七〇年頃）に大きな改造がなされて現在の形となっている。そのため本殿では内外陣境の取り付き、供物壇の設置、拝殿では向拝・廻り縁・賽銭箱設置、吹き放ち部のために入側柱の追加など当初の計画からすると納まりや計画上でおかしな部分が多々みられる。現在の社殿は元禄頃にはほぼ現状の平面になっていたとされる。

このことから大滝神社社殿建設の計画時である天保十一年頃の柏原社殿平面は、現状とほぼ同じであったと考えてよいことがわかる。柏原社殿の成立事情を考慮すると、大滝神社平面は、柏原社殿の本殿身舎の前面中柱の省略、向拝中柱の省略、本殿と拝殿の明確な区別、拝殿の柱配置や壁・建具・向拝柱と唐破風屋根の取り付けなど平面を整理して発展させた形であると考えてよいことがわかる。

二　各社殿立面の比較

図2に、三社殿の正面及び側面の立面図（現社殿は一部写真）を示した。以下では平面の比較で現れなかった屋根・壁・建具・基礎などを比較する。

いずれの本殿も基壇を設け、身舎は亀腹、向拝は直接基壇上に礎石あるいは土台を設けて柱を立てる。柏原社殿は割石の乱積みに切石布積み、当初社殿案と現社殿は基壇・亀腹とも切石積みである。現社殿は亀腹下に水平の石段を設けてより装飾的とする。柏原社殿が礎石、当初社殿案と現社殿がいずれも土台となるのは社殿の建立時期を反映しているとみられる。向拝の浜床、そこから木階で廻り縁に至る段差の構成は同じである。廻り縁は柏原社殿が縁束によるのに対して、後二者は三手先腰組によって支えられる。側面壁は柏原社殿、当初社殿案が奥行二間の板壁であるのに対して、現社殿は奥行三間とし中央に桟唐戸風の内開き開口部を設け、残りの側面と背面の壁板に彫刻を取り付ける。

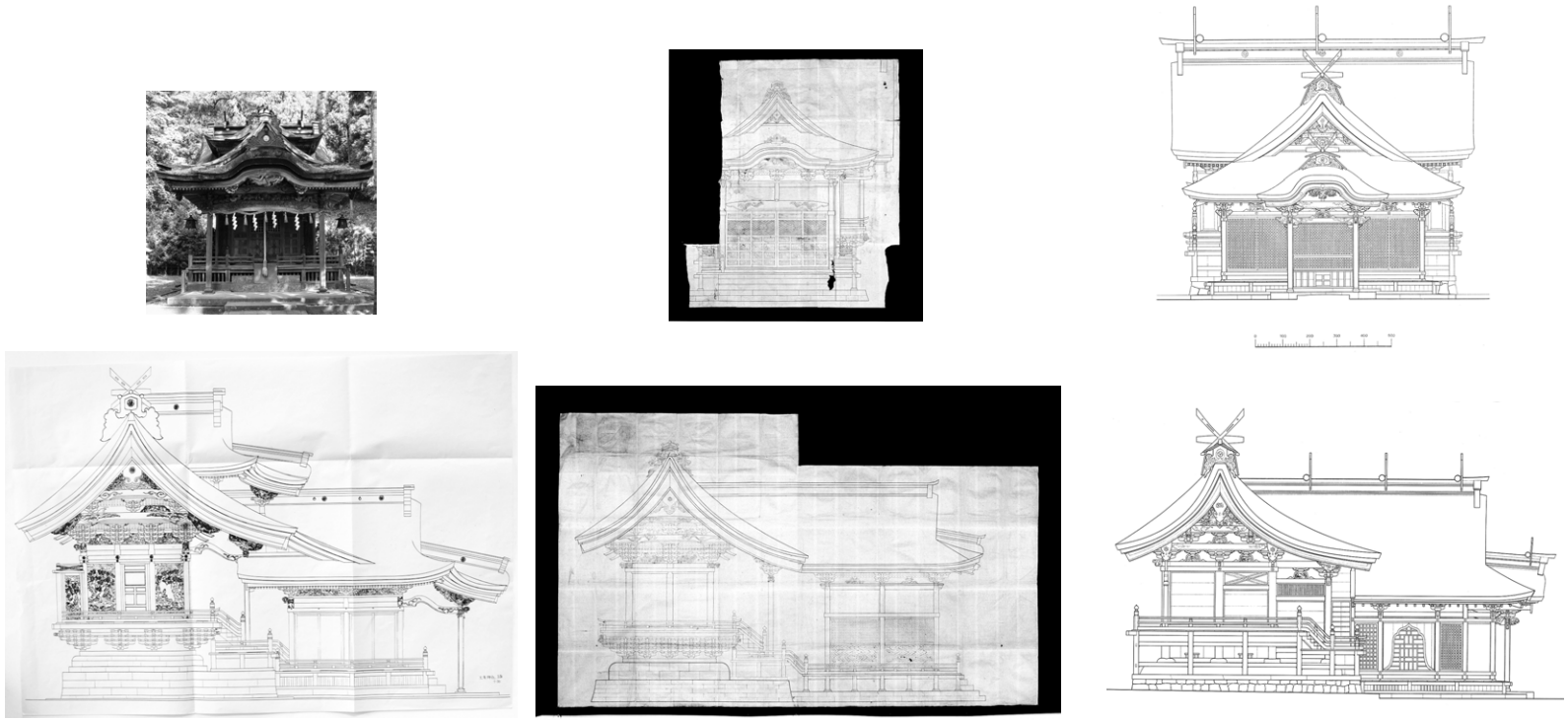
本殿屋根はいずれも流造で、妻飾を二重虹梁とする。柏原社殿は出三斗で桁を受け、棟に大瓶束を入れて笈形を付ける。中備は蟇股とする。これらは元禄期に装飾豊かなものに改造されたものである。当初社殿案・現社殿は三手先で一重目の虹梁を受け、出組で二重目の虹梁を受ける。さらに虹梁下端に支輪を設け、中備に装飾豊かな蟇股をいれる。屋根の棟に柏原社殿と現社殿は鬼板と千木・鰹木を載せるが、当初社殿案では鬼板のみである。ところが現社殿では流造屋根の前面屋根に入母屋造社殿に軒唐破風付きの向拝を設けた一間社を載せる。この様子は後述する拝殿屋根の棟上に跨がった姿で、柏原社殿や当初社殿案には全くみられないものである。

拝殿は柏原社殿が入母屋造妻入の前面に向唐破風の向拝を付した外観で、向拝柱が拝殿主屋からの出が少なく、軒唐破風付きに見える。当初社殿案は入母屋造妻入の拝殿前面に軒唐破風を付したもので、一見柏原社殿の拝殿に近い。現社殿は拝殿から向拝柱を十分手前に出し、主屋屋根から庇へ葺き下ろし、軒唐破風を設ける。柏原社殿の拝殿屋根には棟に千木鰹木を載せるが、当初社殿案・現社殿にはみられない。

基壇は柏原社殿が一段、当初社殿案・現社殿が二段の切石布積みである。廻り縁をみると、柏原社殿は縁の出が少なく高欄が無ないのに対して、当初社殿案・現社殿は擬宝珠高欄を廻す。正面入口は柏原社殿が中央にはめ殺し格子戸と両脇に引き違い格子戸をいれ、側面は内側に引き違い戸をもつ火灯窓と格子戸風の板壁として本殿に直接続く。当初社殿案は正面全面に桟唐戸風の引き違い戸、側面に半蔀をいれるが、本殿側は分からない。現社殿は正面と本殿側の出入口に両折れ桟唐戸、側面に引き違い舞良戸をいれる。

柱は柏原社殿が角柱、当初社殿案と現社殿は円柱で、組物は柏原社殿が出三斗に一軒疎垂木、当初社殿案と現社殿は軒支輪に出組で二軒繁垂木である。柏原社殿の拝殿は本殿と同様に元禄期に外観を装飾的とするために大きく改変されたものが基本となる。

拝殿と本殿の立面構成は三社殿とも本殿と拝殿の屋根を接合した



大滝神社の現社殿
（福井県教育委員会蔵）

大滝神社の当初社殿案
（大滝神社蔵）

柏原八幡宮の社殿
（『修理工事報告書』より転載）
（側面図は左右反転）

図２　三社殿の立面図と写真（上：正面　下：側面）

外観は同じで、柏原社殿が接合部に壁が設けられて内部となっているのに対して、当初社殿案や現社殿は外部となる点が大きく異なる。社殿の床高は、拝殿、本殿向拝部（柏原社殿は前室）、本殿の三段で構成されている点は同じである。当初社殿案や現社殿は本殿基壇を身舎と向拝で分け、身舎に亀腹状の切石を設け、さらに廻り縁を腰組で持ち出して高さを強調して、本殿の荘厳さを増している。

前述したように現社殿は柏原社殿や当初社殿案と大きく異なって、流造本殿の前方屋根に千鳥破風を設けるように軒唐破風付き向拝をもった入母屋造妻入の本殿を載せる。この姿は側面からみると二階建て本殿であるかのようである。

一方、本殿の向拝と拝殿の屋根の軒先高さを比較すると、当初社殿案では両者はほぼ同一高さとなり、一塊の社殿と感じられるのに対して、柏原社殿や現社殿は、軒先の高さを変えて本殿屋根を高くし、本殿の荘厳さを強調する。現社殿では拝殿の内法上の壁高を押さえることでさらに屋根高さの違いを強調する。これは拝殿にもみることができ、拝殿向拝部分を当初社殿案のように軒唐破風とする手法や、柏原社殿のように拝殿よりわずかに向拝柱を出して向唐破風屋根をみせる手法から、現社殿のように大きく一間手前に向拝柱を出して軒唐破風付きの向拝を設ける手法へと変えることにもみられる。この屋根の高さを変える手法は、本殿屋根上の軒唐破風付きの向拝を設けた入母屋造社殿によってさらに強調される。屋根の構成はその段差からみると、柏原社殿が正面二段・側面二段となり、当初社殿案が正面一段・側面一段、現社殿が正面三段で軒唐破風を含めると五段、側面も三段で軒唐破風を含めると五段となる。まるで渓谷の岩間を流れる滝のようである。立面の屋根構成は、当初社殿案は柏原社殿よりも単純であり、現社殿は柏原社殿より格段と複雑になっている。

三　各社殿間の類似点と相違点

以上のように、柏原社殿・当初社殿案・現社殿の平面と立面における類似点あるいは相違点を確認した。本殿と拝殿から成る一体の社殿である点、本殿と拝殿の屋根が一つの大きな屋根で構成され、その外観が柏原社殿と当初社殿案が良く似ていることが確認できた。

さらに詳細に建物の構成要素ごとに一覧にすると表1となる。現社殿は当初社殿案を基本に、本殿では向拝の中柱を抜く、脇障子の配置方向を変える、組物の手先を少なくする、千木・鰹木をのせるなど細かな部分で変更されたことがわかる。

大きく変わった部分は二点で、第一は本殿奥行を二間から三間とし、中央に開口部を設けた点である。これは本殿奥行がほとんど変わっていないため、構造的に大きな変更ではない。第二は外観からはみえ難いが二重目の屋根を設けて、正面を外観二階建て風の本殿としたことである。これも本殿の大屋根正面に千鳥破風を設けるようなもので、構造的には大きな変更ではない。現本拝殿の断面図（図3）をみれば明らかである。

国京　大滝神社社殿と柏原八幡宮社殿

しかし、千鳥破風ではなく新たに社殿を設けて二階建て風社殿にするという発想は全く新しいものである。当初本殿は柏原社殿とほぼ同じと考えてよく、柏原社殿の外観を直接みなくても平面からある程度推測できるものである。また、当初社殿案が考えられた天保期には腰組による廻り縁持ち出しや基壇と亀腹の設置は特に珍しいものではない。拝殿において三社殿は建具の形態や組物あるいは唐破風の付き方に違いが見られるが、建築の構成要素が大きく異なるものではない。その時の予算や時代的あるいは施主の趣向が反映される細かな要素でしかない。

本殿と拝殿の屋根を一体とした構成の仕方は、柏原社殿あるいは

表１　各社殿の建築要素の比較

建築部位				柏原八幡宮社殿(元禄改造後)	大滝神社当初社殿（絵図）	大滝神社現状社殿
本殿	基本構造		間口（間）	3	3（円柱・正面中柱抜）	3（円柱･正面中柱抜）
			奥行（間）	2+1（前室）	2（円柱）	3（円柱）
			向拝間口(間)	3（角柱）	3（角柱・中柱抜き）	3（角柱・中柱抜き）
			階	有	有	有
			浜床	有	有	有
			浜縁	有（高欄付）	有（高欄付）	有（高欄付）
			側面開口部	板壁・格子欄間	板壁	扉
			廻縁	４方（高欄付）	４方（高欄付）	４方（高欄付）
			腰組	無	三手先	三手先
			脇障子	左右直交	左右直交	左右斜め
	妻飾り		虹梁	二重虹梁・蟇股	二重虹梁	二重虹梁
			支輪	無	二重	二重
			懸魚	蕪懸魚	蕪懸魚	蕪懸魚
	斗栱		斗栱	平三斗	四手先	三手先
			中備	蟇股	蟇股	蟇股
	向拝		柱	4（角柱）	4（角柱）	2（角柱・中柱抜き）
			繋ぎ虹梁	有（直）	無	有（海老虹梁）
			手挟	無	有	無
	屋根		葺材	檜皮	柿？	檜皮（元柿）
		一重目	形式	流造	流造	流造
			垂木	二軒繁垂木	二軒？（拝殿より推測）	二軒繁垂木
			軒積		二重軒積	二重軒積
			千木	有	無	有
			鰹木	有	無	有
			鬼	鬼板	獅子口	獅子口
		二重目	形式			入母屋造屋根・妻入
			同　向拝			有（軒唐破風付）
			身舎柱			角　一軒
			向拝柱			角　二軒
			鬼			獅子口・鬼板
	基壇・基礎		縁腰組	無（束）	三手先詰組	三手先
			礎石	有	無（土台）	無（土台）
			亀腹	有	有	有
			基壇	有	有	有
拝殿（神輿殿）	基本構造		間口（間）	3（角柱）	2（円柱）	2（円柱）
			奥行（間）	2（角柱）	2（円柱）	2（円柱）
			向拝間口(間)	１間（軒唐破風付）	－	2（軒唐破風付）
			指鴨居(虹梁)	無	指鴨居（虹梁）	指鴨居（虹梁）
			階		前（石階）後（木階）	前（石階）後（木階）
			床	前方	無	無
			廻縁	３方	４方（高欄付）	４方（高欄付）
	建具		正面	引き違い戸・半蔀	引き違い桟唐戸	両折桟唐戸
			側面	火灯窓（引き違い）・嵌め殺し格子戸	半蔀	引き違い戸
			背面	－	？	引き違い戸
	斗栱		軒飾り		二重支輪	二重支輪
			斗栱		二手先	出組
			中備	蟇股（正面）	蟇股	透かし彫り
	屋根		垂木	一軒疎垂木	二軒半繁垂木	二軒繁垂木
			葺材	檜皮	柿？	檜皮（元柿）
		身舎	形式	妻入・向拝	妻入（軒唐破風付）	妻入・向拝・軒唐破風付
			軒積	二重軒積	二重軒積	二重軒積
			千木	有	無	無
			鰹木	有	無	無
			鬼板	鬼板	獅子口・鬼板	獅子口・鬼板
		向拝	繋ぎ虹梁	有	無	有
			水引虹梁	有	無	有
			正面唐破風虹梁	有	無	有
			軒唐破風	有	無	有
	基壇・基礎		基壇	無	有	有
			礎石	有	無（土台）	無（土台）
				床下格子	無	床下格子

柏原社殿に一致する部分
当初社殿案に一致する部分

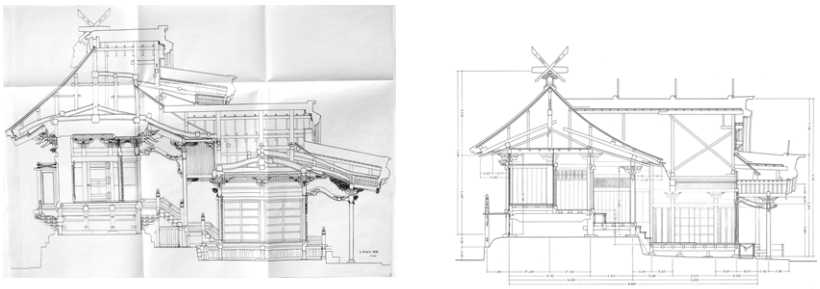


図３　大滝神社（左）（福井県教育委員会蔵）と
柏原八幡宮（右）（『修理工事報告書』より転載・図は左右反転）の社殿断面図

それに似たような建物の何らかの影響を受けたと考えても不思議ではない。当初社殿案は柏原社殿より屋根構成が単純に計画されていたが、設計変更がなされた現社殿は柏原社殿を遥かにしのぐ複雑な屋根構成となっている。現社殿は柏原社殿を何らかの事由で意識し、あるいは何か別の影響を受けて計画された。その上で屋根構成の仕方による効果をさらに高めるために計画案が変更されたと考えられる。もっとも柏原社殿の立面からは本殿屋根の千鳥破風位置に新たな社殿を設ける発想は生まれてこないとみられる。

四　江戸時代の二階建て社殿遺構と雛形本にみる二階建て本殿

大滝神社の現本殿は断面図から構造的には二階建ての社殿ではないことが明らかとなったが、外観上は二階建て風社殿と考えられなくもない。そこで二階建て社殿の類例を探ると、数は少ないが重要文化財の富士山本宮浅間大社本殿（静岡県富士宮市）（写真３）、神部神社・浅間神社大拝殿（静岡県静岡市）、前山塩野神社拝殿（長野県上田市前山）、菅原神社拝殿（山口県光市束荷）がみられる。

写真３　富士山本宮浅間大社本殿（福井宇洋氏提供）

掲げたもののうち、後三神社は拝殿が二階建てで、本殿は富士山本宮浅間大社本殿のみである。富士山本宮浅間大社本殿は一階を正面五間側面四間の前面に庇一間を付けた四方葺き下ろし屋根に正面三間奥行二間の三間社流造を載せたもので、浅間造といわれる。一階・二階とも屋根は檜皮葺で、慶長九年（一六〇四）の建立である。寄棟造の屋根上に流造の三間社が載る珍しい外観で、二重二階の本殿である。

一方、文化九年（一八一二）刊行の石川重甫による『匠家雛形増補

初心伝下2』には「三間社三手先中社抜揚作」として二階建ての本殿が掲載される。[3] 挿図（図4）によると、本殿は流造三間社の屋根上に切妻造の二階を載せる。一階平面は正面三間側面二間で、手前一間に建具を設けない吹き放ちの前室、奥一間を正殿、両側を脇殿として祭壇とする。前面に三間幅の軒唐破風付きの向拝を設ける。身舎周囲に廻り縁を置き、縁後方に脇障子柱を立て身舎柱との間に脇障子を入れる。身舎柱（円）と向拝柱（角）は海老虹梁で繋ぎ、浜床を設けて木階を設ける。浜床と廻り縁の段差は十一級程あり、内法程の高さとなって異常に高い。本殿は低い基壇の上に亀腹を設け、土台上に柱を立てる。廻り縁が多少高くなっていることを除けばごく普通の流造本殿である。二階平面は一階の正殿幅がそのまま二階となった正面一間側面二間（一階と同じ幅）の周囲に廻り縁と高欄を設けた切妻造建物を載せる。二階外観からは神社本殿を想起させるものではないが、全体として明らかに二重二階の本殿である。

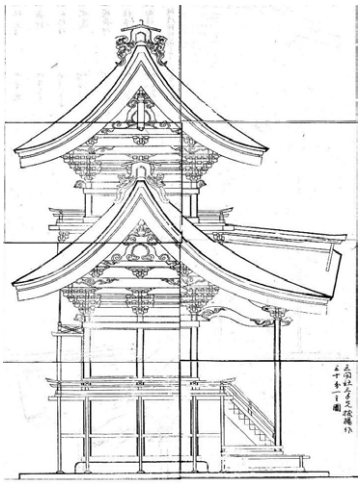


図4　三間社三手先中社抜揚作
「匠家雛形増補初心伝下2」より合成
（日本建築学会図書館デジタルアーカイブス）

また、江戸時代には本殿と拝殿が一体となった七面造という二階建て社殿がある。『建築大辞典』[4]によれば、七面造とは「江戸時代に生まれた神社建築様式の一。浅間造の変形。この名称は日蓮宗守護神の七面菩薩から出たという。平面は十字形。正面中央に唐破風の向拝を付ける。主屋は平入り、入母屋造り。屋根上に方形造りの楼を載せ、楼は正面千鳥破風、両側面は軒唐破風とする。」とある。この建物の平面・立面が宝暦九年（一七五九）木暮甚七による『新撰大工雛形巻1　宮形』にすでにみられる（図5）。[5] このことから江戸時代中期頃には二階建ての社殿の存在が広く知られるようになったことがわかる。ちなみに七面造り社殿である呉羽山七面堂が富山藩士によって万治年間に建築されている。[6]

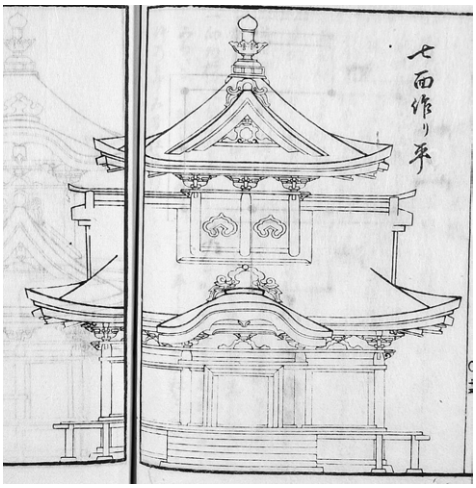


図5　七面造
（「新撰大工雛形巻1 宮形」早稲田大学図書館蔵）

このように二階建て本殿が近世初期には建てられ、大工の雛形本としての二階建て本殿図が宝暦九年に「七面造」で紹介され、文化九年に「三間社三手先中社抜揚作」が江戸で出版されていたことを考えると、天保九年頃に大坂で仕事をしていた大久保勘左衛門がこの情報を知っていたことは十分考えられる。[7] また、大滝神社社殿の

設計変更は天保十二年七月までにおこなわれており、宝暦九年の雛形本刊行から八十二年、文化九年の刊行から二十八年が過ぎており、越前地方にも二階建て本殿の情報がもたらされていたことは十分考えられる。

五　当初社殿案と三田村八右衛門

すでに前稿で述べたように、大滝神社の社殿普請に際して地元五箇の大工は、天保十一年四月に口上書[8]を神社神主に提出し、三田村氏をはじめとする世話役中に仕事の取りなしを願っている。しかし、普請工事は志比大工大久保勘左衛門等によっておこなわれた。勘左衛門は天保十一年八月三日、九月八・九日に五箇に出向いているから、この頃から大滝神社の社殿普請に関して何らかの動きをしていたことがわかる。このことから神社普請で中心的な役割を担っていた三田村氏と大久保勘左衛門に何らかの関係があったことが推測される。

三田村氏は五個荘の製紙業の由緒ある家柄で、福井藩のみならず幕府の御用紙工を勤めていた。天保十一年当時の三田村家当主は八右衛門で、丹波篠山藩の武家から養子に入っているという[9]。八右衛門は社殿普請の世話役である月番には名を連ねていないが、天保十二年の「金銀米出入大工勘左衛門殿請取帳」[10]の設計変更に関する支払部分で、勘左衛門に支払う木挽の手間増額八十匁（飯米料に払うとの記載もみられる）を世話役の月番が八右衛門に支払っている記述がみられ、八右衛門と勘左衛門の関係を窺い知ることができる。また、安政六年（一八五九）の大滝神社御宮棟の銅板葺き工事で会計を担当した庄屋喜兵衛が、あまった銅板・銅釘・古鉄類の売却代金を八右衛門に確認してもらい、その金額を受け取っている[11]。この二つの文書では八右衛門には「様」が用いられ、神社普請の月番や庄屋より上位の地位にあることがわかる。

先の「口上書」と合わせて考えると、大滝神社普請では元より三田村家が中心的な存在であったことは明らかで、八右衛門も天保の社殿普請に際して中心的役割を担ったと考えられる。八右衛門が柏

図６　板地著色大瀧児大権現祭礼図絵馬
（天保５年）（大滝神社蔵）

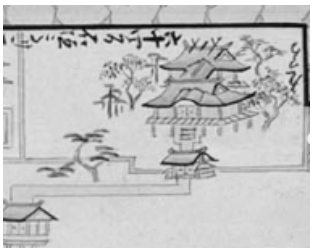


図７　福井東照宮「御城下之絵図　正徳四」より
松平文庫 21325（福井県文書館保管）

原八幡宮のある丹波国篠山の生まれであることは、大滝神社社殿の普請に何らかの影響を与えたことは十分考えられる。

再建前の本殿は一間社流造で向拝に軒唐破風はなく、単独で建てられ、拝殿は一段低い平地に建てられていた（図6）。しかし、再建後は本殿と拝殿が近接して建てられ、本殿と拝殿は一つの屋根の社殿となった。この外観は柏原八幡宮本殿及び拝殿とほぼ同じ構成の建物である。管見によれば、天保期の越前では本殿と拝殿が別々に建てられ、本殿と拝殿を結合する複合社殿は珍しく、福井城下の東照宮・愛宕山権現など少数に限られていた。その外観は城下絵図によれば、本殿と拝殿を相の間の一段下がった屋根で連結する権現造とみられ（図7）、本殿と拝殿の屋根が一体となる社殿ではなかった[12]。勘左衛門はこのことから柏原八幡宮本殿及び拝殿の様子を三田村から聞き、それを参考に大滝神社本殿及び拝殿の社殿案を計画したことが十分考えられる。

六　決算帳と社殿案変更の時期

しかし、これでは当初の社殿案ではみられなかった屋根の複雑な層構成がどのようにして生まれたかは明らかではない。

大久保勘左衛門は本殿及び拝殿の「御本社金積帳」[13]を天保十一年十一月、「御本社木積帳」[14]を同十二月には提出している。しかし、社殿計画絵図の作成及び変更時期については明らかではない。彼の「萬覚帳」から天保十二年二月から三月にかけて、志比大工の善太郎と共に絵図を描いていたことは明らかである[15]。その後三月に釿立、五月以降に勘左衛門に順次支払がなされている。そして前述の「金銀米出入大工勘左衛門殿請取帳」の七月十二日の追加工事の支払である。木挽手間料・飯米料の前に「一金七両弐歩　受取　是ハ絵図木取奇進札けすり　悉結煩料」とあり、二・三月の絵図作成とは別にあることからこの時までに社殿の絵図（設計）変更がおこなわれていたことはわかる。

一方、天保の社殿普請関係の決算帳である「弘化二巳正月改メ取替不足指引改メ附出し帳　宮世話中」（以下「附出し帳」）[16]には、「大工勘左衛門殿之訳合／渡し　約定／一、金弐百五拾両／一、米百拾俵也／与内として　跡々願ニ付　一、銀六貫匁／〃　一、米三拾俵也」とある。この文言からは勘左衛門分の当初工事費が決定していたこと、その後に追加による増額を勘左衛門が願ったことがわかる。このことから契約時には当初の社殿案で工事が進められ、後に現社殿に変更されて工事費が増額したことがわかる。この経過から考えると、二月から三月にかけての勘左衛門の絵図作成は釿立の前であるから当初の社殿案絵図であり、その後に設計変更がなされたことになり、前述の「金銀米出入大工勘左衛門殿請取帳」と一致する。

天保十一年十一月に神社に提出された「御本社金積帳」によれば、工事費は木材を除いて四百六十五両二歩（飯米一四〇俵分五十五両を含む）であった（表2）。勘左衛門が当初請負った額は「附出し帳」によれば、前述のように金二百五十両と米百十俵とあって請負額

表２　「御本社金積帳」（大滝神社蔵）

御本社金積帳		
部材名	数	金額（両）
木鼻獅子	12	10
帰ル又	10	10
破風かさり	両方とも	10
多挟	4	6
向拝帰ル又	3	6
脇障子	2	10
小脇	2	3
拝殿彫物		15
壁板	7	35
本社敷鼻※	4	3
拝殿敷鼻※	4	3
〆	彫物悉皆	111
二丈四尺六寸		
二丈弐尺		
亀はら		
壱丈弐尺二寸		
壱丈六尺四寸		210
尺八石	150	2 貫 250 匁
六八石	50	500 匁？
〆	石悉皆	30
屋根屋手間		25
棰本社	74 本〆 296	
同拝殿垂木	〆 312	
二口〆	608	壱ツ三匁五分
釘かくし	本社 18、拝殿 28　〆 46	6　壱ツ弐朱
両破風		10
唐破風		3（5 訂正）
千鳥破		1 両 2 歩
千木・鰹木		5
拝殿扉鉄金具		6
高欄・脇障子		5
角木鼻・茅おい・布裏		5
鉄物		18
	〆（金具悉皆）	94 両 2 歩
大工木挽		150
飯米	140 俵	55
〆		465 両 2 歩

し）が描かれるのに対して、銭金物は一切描かれていない。天保十一年十一月提出の「御本社金積帳」には銭金物が含まれるのに対して絵図には描かれていないということは、銭金物が別途工事となったということで、絵図はそのことを反映して描かれたと考えられ、合わせて描かれた時期は工事着工前とみることができ、前述の二月から三月に描かれたということに合致する。

これらから勘左衛門は大工・木挽・彫物のみを請負ったと考えられ、「御本社金積帳」でこれらの見積金額を合計すると、二百六十一両と飯米一四〇俵となる。この金額で値引きを考慮すると、「附出し帳」の当初請負額二百五十両と飯米百十俵に近くなる。このことも当初の絵図でもって工事が開始されたとすることを示すものである。

さらに「附出し帳」には屋根屋・石屋等と同列に勘左衛門を通してではなく、宮世話人から直接大工善太郎に二百匁が支払われた記載があり、その名の左横に「取かへ」と添え書きがある。前述のよう「萬覚帳」には天保十二年二月・三月に勘左衛門と共に善太郎は

と大きな開きがある。「御本社金積帳」の四百六十五両余から飯米五十五両を差し引いた四百十両余が木材と飯米を除いた当初の請負工事費となるはずである。しかし、「附出し帳」との差額は百六十両余となり、この金額がすべて値引きとは考えられず、勘左衛門は社殿全てを請負っていなかったと推定できる。

この「附出し帳」には追加支出として勘左衛門とは別に屋根屋へ銀千百貫匁（十八両一歩強）、石屋に百匁、金物屋に八十三匁、人足代に六五〇匁、鍛冶屋に八十一匁、釘代に二百匁などが宮世話人から支払われている。これらの内容が勘左衛門の工事に含まれていれば、特別な事情がない限り彼に支払われるものである。また、金積書と絵図を比較すると、絵図には細かな彫刻類（壁彫刻は記載な

絵図を描いていて、その人工は勘左衛門の勘定に入っていた。しかし、この金額は屋根屋、石屋、金物屋、鍛冶屋と同じように善太郎へ直接支払われていることから、勘左衛門の仕事範囲とは別におこなわれた作業であること、また三月以降になされた作業であることがわかる。善太郎に支払われた二百匁は「取かへ」との添え書きから当初社殿案から現社殿への絵図変更作業と推測される。前稿で推定した大工作料と飯米代込みの一人工を約四・四匁と仮定すると、四十五・五人工程を要したことになる。前述のように天保十二年七月十二日に勘左衛門に絵図木取りの増手間料を支払っていることから善太郎の作業日数を考えると、遅くとも五月末には設計変更が開始されていたことが推測される。

七．まとめ

大滝神社里宮の本殿及び拝殿の当初案と現社殿、さらに柏原八幡宮本殿及び拝殿の平面図および立面図を比較検討した。その結果、当初案・現社殿は柏原八幡宮社殿と平面及び立面の構成がよく似ており、その影響が十分考えられた。本殿と拝殿を一つの屋根で構成する外観は天保期の越前では珍しい形態であり、その可能性はさらに高まるものである。現社殿はさらにそれを発展させたものとなっていた。大滝神社と柏原八幡宮の両社殿を結びつけるものとして、丹波篠山藩の武家から三田村家に養子に入り、天保期の再建で中心的な役割を果たした八右衛門の存在が考えられた。

一方、外観からみて本殿は二階建て風本殿のような形となり、柏原八幡宮社殿からは生まれないもので、他の何らかの影響が考えられた。二階建て本殿は近世初期からその遺構が存在し、江戸時代中期以降の大工雛形本にも見え、天保期の大滝神社本殿および拝殿の建設時には十分知られたものであったと考えられた。しかし、その発想がどのようにして生まれたのかは明らかにすることが出来なかった。

また、新たに見いだした天保期の決算帳から、実際に大久保勘左衛門が請負った工事内容とその金額を明らかにし、社殿案の変更が開始された時期を天保十二年五月末以前と推定した。今後の課題として、見積金額ではなく、実際の社殿普請金額、三田村八右衛門と社殿普請との関係、社殿変更が誰によって指図され、変更の発想は何処から生まれたのかを明らかにしてみたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、大滝神社、福井県教育委員会、福井県文書館、日本建築学会図書館、早稲田大学図書館、松平宗紀氏、大久保洋一氏、三田村士郎氏、福井宇洋氏をはじめとする関係各位から資料提供や助言を戴きました。これら関係各位に末尾ながら感謝申し上げます。

注

（1）拙稿「大滝神社本殿及拝殿の普請経過と設計変更時期について―大久保

勘左衛門家史料の研究（三）」（『若越郷土研究』第六六巻一号・三一二号、二〇二一年）。

（2）『重要文化財八幡神社本殿及び拝殿修理工事報告書』（重要文化財八幡神社本殿及び拝殿保存修理委員会、一九七六年）。

（3）日本建築学会図書館デジタルアーカイブス、石川重甫『匠家雛形増補初心伝下二』。

（4）『建築大辞典』（彰国社、一九九三年）。

（5）早稲田大学図書館蔵、木暮甚七『新撰大工雛形巻1　宮形』。

（6）巧刀悠・伊藤洋子「七面山敬慎院寶珠殿に関する考察」（『芝浦工業大学修論概要』二〇二〇年）。

（7）拙稿「永平寺勅使門と大久保勘左衛門―大久保勘左衛門家史料の研究（二）」（『若越郷土研究』第六五巻一号・三一〇号、二〇二〇年）。

（8）大滝神社蔵「口上書」。「（前略）何卒／右御願申上候通　御神主様ゟ三田村様始御世話人中様江御宜／敷御披露御執成之程偏ニ奉希上候以上」。

（9）三田村士郎氏所蔵の由緒書は、現在越前市で調査中で、詳細は明らかとなっていない。

（10）大滝神社蔵「金銀米出入大工勘左衛門殿請取帳」。

（11）大滝神社蔵「安政六巳未年五月　御宮棟御普請諸入用帳」（福井県文書館の撮影資料 G0501 00152 94~101）による。本殿及び拝殿屋根の棟の銅板葺きとの記載はないが、永平寺法堂の棟の鬼板を安政五年に銅板で包んだ時の銅板や銅釘の金額と比較して、問題ないと考えられる。

（12）松平文庫（福井県文書館保管）の各種の福井城下図。なお、『福井県指定有形文化財本荘春日神社本殿修理工事報告書』（本荘春日神社建設委員会、二〇一六年）によれば、江戸末期には本殿と幣殿が大滝神社社殿のように一体となっていたことが報告されている。しかし、幣殿は覆屋内にあった本殿に後から増築されたもので、本殿の向拝屋根軒先から幣殿と屋根が一体となった痕跡はみられない。

（13）大滝神社蔵「御本社金積帳」。

（14）大滝神社蔵「御本社木積帳」。

（15）前掲1）。

（16）大滝神社蔵「弘化二巳正月改メ　取替不足指引改メ附出し帳　宮世話中」。（福井県文書館の撮影資料 G0501 00149 75~80）による。